



矢島 渚男 選

小春日につつまれたせい童歌

滝沢市 小田佐枝子

【評】小春日の暖かい日差しにつつまれてうとうととして童歌を歌っている自分。昔、子供に唄った童謡や子守歌か。いまは自分に歌っていた。「つつまれ」の丁寧さがいい。

食べ方を書き添えて呉れポポロ着く

町田市 枝沢 聖文

【評】愛好者もあろうか。私も一度食べてみたが、いわく言い難い味だった。親切な友人が食べ方まで書いて送ってくれた。俳句にする何となしく俳味が感じられる不思議な果物。自画像のポスターを貼る小春かな

鹿児島市 鶴屋 洋子

【評】微笑ましい生徒会の選挙。民主主義の基盤は選挙だが、大人の世界ではその基盤がぐらついた。元氣らし友の名並ぶ菊花展

下関市 粟屋 邦夫

婆として繋ぎ合ふ手や七五三

東京都 神通美美代

小高きに一揆塚あり帰る花

水戸市 大野太加し

石路の花老いは手助け断りぬ

東京都 川上 福美

年金日横に厚着の老婦人

高島市 足立てるを

だんだんと文旨となり冬青空

小平市 中沢 清

老いもまた笑ひの種に冬の晴れ

高知市 加田 紗智

高野ムツ才 選

西の市連れし子どもの手の火照り

羽生市 岡村 実

【評】縁起物の熊手の出店が並ぶ西の市。大勢の参拝客で賑わう。親から決して離れないように、握った手の熱気から、子供の不安と興奮とが、それこそ手に取るように伝わる。小春日や洗濯終へてさあどこへ

武蔵野市 相坂 康

【評】掃除も洗濯も終えた。あとは自由時間。のんびりして、これはこれで豊かなひとときだが、予定がないとは、少し寂しきようでもある。車座は平和の形にこり酒

茅ヶ崎市 清水 吞舟

【評】夜なら座敷、昼なら庭先。農業に勤しむ仲間の一人が手に入れたにこり酒を傾ける。輪になって座れば、同じ苦労を経た顔ばかり。日向ぼこ潮の匂ひの町に住み

対馬市 神宮 齊之

母屋より馬屋あかるき柿すだれ

東京都 吉村 恵子

冬に入る走り根にある底力

牛久市 中村 栄子

柿を吊るならひの釘を手探りぬ

越谷市 小林ゆきお

思い出は烏瓜へと閉じ込めよ

我孫子市 森住 昌弘

湯豆腐のふるふる煮えて話下手

龍ヶ崎市 小宮 光司

鉄切るや青き雫の凍て返る

大和市 おおもりじゅん子

正木ゆう子 選

まばたきの一瞬鷹の爪ゆるむ

柏市 佐藤 敏文

【評】これは鷹を自分の手か腕に留めていなければわからない感触だろう。警戒している生き物は瞬かない。瞬きは気を許している証拠。貴重な経験を元にした、繊細な句である。蒼ければ無に近づいて冬の星

宗平 圭司

【評】実際には青い星は若く、赤い星は老いているらしい。しかし無に近づくとほもつと感覚的な印象だろう。仰々星は、青いシリウスか。夕方の賑はひが好き日記買ふ

金沢市 岩本 卓夫

【評】日記を買う頃は日暮も早く、忙しい中にも町は華やか。夕飯の買い物物他に、今日は日記を買う。見るだけ迷うだけでも楽しい買い物。冬めくと思ひし日より心急ぎ

西宮市 平田 あい

どの鍋も冷たく触れて冬初め

横浜市 岡 まゆみ

花石路や城壁のふと陰るとき

浜松市 野畑 明子

眼おとろえシリウスだけの夜の空

新座市 洞口 英夫

印籠型メタルや秋の水戸マロン

松戸市 稲葉 豊美

紅小灰蘇鉄の花は旨かろう

南房総市 山根 徳一

この日まで朝顔咲いてゐるなんて

新潟市 若林れい子

小澤 實 選

冬の空き地三角ベースする子やーい

松江市 三方 元

【評】あまり広くは無い空き地で、三角ベースをする子を探して、声をかけている。かつて遊んだことのある空き地なのかもしれない。冬だし、そんな子は現れないか。冬ぬくし配膳口ポは振り向かず

静岡市 山本 正幸

【評】人間とは違って、配膳口ポは振り向くことはない。ちょっと物足りないが、冬ぬくしを取り合わせたというところは認めている。マフラーに顔半分の立ち話

福山市 松崎 映子

【評】マフラーで顔半分をおおって、顔半分だけ出して、立ち話をしている。冷たい風が吹いているのだろう。これほど過酷な立ち話はなさそう。臍深き鮫ばん蒸かし小春かな

国分寺市 野々村澄夫

乾拭きのコンセント冬来たりけり

豊中市 葉村 直

聖樹なるてっぺんの星姉が付け

流山市 高橋 郁代

駆け去っては駆け戻る犬冬霞

高岡市 池田 典恵

豆腐屋のおからサービス花八つ手

日立市 菊池 三三夫

野良猫や落葉を掻きて隠す糞

寝屋川市 岩木 利美

浮石を踏み仰げ反りぬ川瀧れて

東京都 天地わたる

俳句あれこれ 谷口智行(俳人) 熊野と平松小いと

△紙白く書き遺すべき手あたむ 平松小いと△
かつて高浜虚子をして「未来の大家」と言わしめた俳人が平松一郎こと、平松小いとである。地方俳誌「熊野」主宰であった父・平松竈馬の影響により幼少時に「ホトトギス」に入門した。旧制新宮中学を卒業した小いとは、昭和十三年、京都帝国大学法学部へ進み、昭和十七年に応召、入隊、二年後の昭和十九年六月七日、中国河南省にて戦死した。享年二十九。頭掲句は、昭和十九年一月、中国大陸派遣直前に帰省した折に詠んだ四句中の一句。この句と同時作入酷寒の瘴癘の地の孰れとも△など三句で同年「ホトトギス」四月号の巻頭を得たが、小いとはそれを知らずに逝った。忌日は「白紙忌」と呼ばれる。小いとと末弟の故平松三平(「かつらぎ」元同人)の旧居には、△水仙黄母に似し妻もたまほし 小いと△の句碑が建てられている。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭